魯迅の「進化論から階級論へ」についての覚え書（上）

中　井　政　喜

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．魯迅の進化論について
　一、初期文学活動（1903-1917）における進化論の内容
　二、中期文学活動（1918-1927）における進化論の内容（以上今号）
　三、後期文学活動（1928-1936）の進化論の内容（以下次号）
Ⅲ．さいごに

Ⅰ．はじめに

瞿秋白（1899-1935）は、のちの魯迅研究に大きな影響を与えた「『魯迅雑感選集』序言」（1933・4・8）で次のように言う。

「魯迅は進化論から階級論へと進みはいり、紳士階級の反抗児・二君に仕える者から、無産階級と労働大衆〔原文は労動大衆――中井注〕の真の友人、そして戦士に進みはいった。」（瞿秋白、「『魯迅雑感選集』序言」、『魯迅雑感選集』、上海青光書局、1933・7、底本は上海文芸出版社〈1980・2〉）[*1]

小論の課題を、上のことを手がかりにして、次のように設定する[*2]。

第一に、魯迅（1881-1936）の「進化論」の、各時期におけるそれぞれの概要を確認する。

そのうえで、第二に、魯迅の場合、どのような過程をへて、「進化論」から「階級論」に移行したのか、を考える。

第三に、「階級論」に移行したのちの、「進化論」はどのような内容であっ

たのか。

小論は、このような課題について、自分なりの考え方を大略述べることを目的とする。

Ⅱ．魯迅の進化論について

魯迅の進化論は、その文学活動をとおしてどのように各時期に現れているのだろうか。各時期におけるその現れの変化・発展を、中国の状況、魯迅の文学活動と関わらせて考える。その場合、魯迅の文学活動における分期を、私は次のように設定する。初期（1903-1917）、中期（1918-1927）、後期（1928-1936）とする[*3]。また、初期と中期とをあわせて、前期（1903-1927）と称することにする。

この覚え書において、進化論に関わって魯迅のそのほかの思想にも言及する。特に前期の進化論については、中国変革（或いは社会改革）の道筋・方法とどのように関わったのか、を中心軸にして考える。そのことをつうじて、後期の進化論の特徴を前期のそれと比較しつつ明らかにしたい。この比較に、小論の重点がある。そのため私は、前期の進化論の内容を概説するけれども、しかしそれは魯迅の進化論を全面的に追究するものではなく、後期の進化論と比較することを念頭においての内容である。

一、初期文学活動（1903-1917）における進化論の内容

中国の伝統的尚古思想は、古代に理想的世界を想定し、そこから下って悪化した現時点を考える。しかし尚古思想とは逆に、ダーウィンの進化論は人類の進化と発展を説いた[*4]。また他方、進化論の自然淘汰は、清朝末期の中国知識人にとって淘汰される民族の側に立って受けとめられた[*5]。しかし進化論は同時に、生存競争と自然淘汰に勝つ希望の存在の拠りどころでもあった[*6]。

初期文学活動において、魯迅の進化論は二つの様相をもって現れる。第一に、たとえば「人之歴史」（1907、『墳』所収、『河南』第1号原載、1907・

12、原題「人間之歴史」）において魯迅は、生物の進化論という自然科学の理論が成立してきた歴史的過程を紹介する。これは科学的知識と考え方を普及し啓蒙する目的をもって書かれた文章と思われ[7]、私はそれを第一の様相の進化論とする。そして第二に、民族革命（中国変革）と結びついて現れる進化論がある[8]、私はこれを第二の様相の進化論とする。

第一の自然科学における啓蒙的進化論は、民族革命（中国変革）の考え方の基礎的部分となり、民族革命（中国変革）の考え方を支え、その中に徐々に組みこまれ融合して、第二の様相の進化論として現れる。この時期、魯迅の進化論は上記の二つの様相をもって並流していた。

１．民族主義との結合

日本留学時期（1902-1909）の頃魯迅は、清朝政府の衰退のもとにある中国が、列強の侵略によって滅亡の危機に瀕しつつあると考えていた。魯迅は満州族政権清朝を打倒し、漢民族による中国の再興を願い、中国が世界の中で自立することを望んだ。日本留学時期の魯迅の思想は、大きく言えば民族主義に包括され[9]、またそこには進化論が結びついていた。のちの1929年当時、魯迅は馮雪峰に次のように語った。

「『その当時（1907年前後を指す――馮雪峰注）、精神革命を信じて個性の解放を主張したのは、全くロマン主義ですが、やはり進化論の思想でもあります。反抗を主張し、民族革命を主張し、被抑圧民族の文学作品と弱小者に同情する反抗的文学作品の紹介を重視したのも、やはり自然淘汰を警戒させ、生存競争を主張する考え方です。』」（馮雪峰、『回憶魯迅』、人民文学出版社、1958・8）

当時、民族滅亡の危機が背景にあって、魯迅は中国が自然淘汰されることを警戒した。そうした進化論による現状認識に基づき、その現状から脱却するために、『天演論』（ハックスレー原著、厳復訳述）における「人」（「社会や民族を富強に向かわせる能動的行動者」）の存在と、「人」による「民」の教化が、魯迅によって学ばれた[10]。

それと同時に、魯迅の前期における進化論は基本的に、ハックスレーの、

すなわち『天演論』（厳復訳述）における、「宇宙過程〔天行――厳復の原文、以下同じ〕」に対する「倫理過程〔人治〕」の相克と、一歩ごとの克服・発展の進化論の影響を受けていた[*11]。魯迅は進化論の「倫理過程〔人治〕」の進展を精神革命（「立人」）に適用したと思われる。すなわち「宇宙過程〔天行〕」に対する「倫理過程〔人治〕」の一歩ごとの進展を基礎とする精神革命（「立人」）を信じ、個性の解放を主張した。能動的行動者「人」は「天行」の恣意に挑み、「民」を能動的行動者「人」の教化のもとに置いた。こうした一歩ごとに進展する「立人」の過程が、民族革命（中国変革）の基底となっていくと考えたと思われる。

２．人の自立の思想

魯迅は上述のように、民族革命（中国変革）の基底として、すなわち精神革命の内容として、人の自立（「立人」の思想[*12]）を据えていた[*13]。

「人がそれぞれ己をもてば、社会の大いなる目覚めは近い。」（「破悪声論」、1908・12発表、『集外集拾遺補編』）

「第一に重要なことは人を確立することである〔其首在立人〕。人が確立してはじめて、あらゆる事が行われうる〔人立而后凡事挙〕。その方法を言うならば、必ず個性を尊重し、精神を向上させなければならない。」（「文化偏至論」、1908・8発表、『墳』）

魯迅は人の確立・自立をつうじての、人としての覚醒をつうじての、中国変革（精神革命）を考えていたと言える[*14]。

「人類はその発生を考えて見ると、最初微生物であり、蛆虫・虎豹・猿から今日にいたった。そのため古い性質が潜在していて、時に再び現れる。この結果殺戮侵略を好んだり、土地・子女・宝玉・絹布を奪いとって野蛮な心を満足させる。」（「破悪声論」、1908・12発表）

魯迅は進化論の「宇宙過程〔天行〕」と「倫理過程〔人治〕」の相克を、人間の精神の発展過程と結びつける。昆虫性禽獣性の精神から理想としての人間性にいたる進化の過程、或る場合には退化の過程に、人間の精神を位置づける。こうした人間の精神の進化（「倫理過程〔人治〕」の進展）が、

人の確立につながり、人の確立が中国変革の基底とされる[15]。この目覚めへの呼びかけ・心声は、優れた個性をもつ「人」(「社会や民族を富強に向かわせる能動的行動者」〈北岡正子、「補論　厳復『天演論』」、前掲〉)、すなわちバイロン、シェリーのような「精神界之戦士」(「摩羅詩力説」、1908発表、第9章)、「明哲之士」(「文化偏至論」、1908·8発表)、「一二士」(「科学史教篇」、1908発表)等から発せられ、人々はその心声を受けて各自の「内曜」(内なる輝き、「破悪声論」、1908・12発表)を輝かせ、覚醒にいたる(これが「ロマン主義」として後年に、馮雪峰によって引用・言及された)。魯迅は進化論を基礎として、中国が自然淘汰されることを警戒し、優れた個性(「人」)に指導される精神革命によって、人々の人間としての確立・自立(人のあるべき精神に進化した段階、「立人」)を意図したと言える。このことをつうじて、中国と漢民族は再興する。このように、魯迅の想定する中国と漢民族の再興(民族革命〈中国変革〉)における基礎には、上の意味での進化論が存在していたと言える。これが第二の様相をもった進化論である。

魯迅は日本留学期の文学活動(1903-1908)において、自らもバイロン、シェリー等のような「精神界の戦士」の一人として自負をもってとりくんだ。しかしこの文学活動は当時の中国知識人(留学生等)の中で、ほとんど反響をもたらさなかった。魯迅は自らの思想の正しさを疑わなかったけれども、しかし自らの力量に失意し、深く内省したと思われる。

1909年の帰国後、1911年に辛亥革命が起こり、清朝政府を打倒した。しかし辛亥革命は中華民国の理想を実現できず、政権を把握した実力者袁世凱のもとで挫折した。

魯迅は、日本留学期の文学活動の失敗と辛亥革命の挫折という、二重の挫折を体験したと考える[16]。魯迅は、のち1918年『新青年』に「狂人日記」(1918・4・2、『新青年』第4巻第5号、1918・5・15、『吶喊』)を発表するまで、ほとんど沈黙の状態に陥る。

二、中期文学活動（1918-1927）における進化論の内容

１．国民性の改革が社会改革の最大の課題

辛亥革命は旧中国の伝統的価値体系を突き崩す方向に進むことができず、旧社会における中国人の精神も生活も旧態依然とした様子にとどまった。辛亥革命の結果は上層の指導者の交代にすぎないかのようであった。こののち1915年、袁世凱の皇帝僭称があり、1917年、張勳（ちょうくん）の復辟（ふくへき）の動きがある[*17]。

「最初の革命は排満で、やり遂げるのが容易なことでした。その次の改革は、国民に自分の悪い根性を改革するよう求めることで、そこで国民は聞き入れなくなったのです。だからこののち最も大切なのは、国民性を改革することです。さもなければ、専制であろうと、共和であろうと、何であろうとも、看板は変わったけれども、品物は元のとおりというのではまったくだめです。」（「『魯迅景宋通信集』八」、1925・3・31、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）

魯迅は、辛亥革命の挫折の主要な原因を（自らの日本留学期の文学活動の失敗における一部の原因も）、中国人の精神革命（思想革命）がなされなかったことにあると考えた。魯迅は1918年、沈黙を破り、『新青年』に文章を発表するようになった。そこにおいて魯迅は国民性の改革（精神革命、思想革命）を社会改革の道筋において最大の課題と考えたと思われる[*18]。魯迅は、『新青年』の「科学」と「民主主義」（「本誌罪案之答弁書」、陳独秀、『新青年』第6巻第1号、1919・1）の主張に賛同した[*19]。同時に進化論について言えば、科学的知識の普及と啓蒙という第一の様相の進化論に比較して、第二の様相の進化論が、すなわち社会改革（精神革命、思想革命）に融合し組みこまれた進化論が、中期文学活動の時期においては徐々に前面に現れるようになったと思われる。この時期においても、両者は並流して現れている[*20]。

２．社会改革に適用される第二の様相の進化論と基礎にある人道主義

魯迅によれば、社会改革（中国変革）の最大の課題とされる中国人の国

民性の悪はどのように改革されうるのだろうか。

魯迅は、「我們現在怎様做父親」（『新青年』第6巻第6号、1919･11、『墳』）で、生物の進化論に基づいた、子女に対する中国の父親の生き方について次のように言う。

「私がいま心にそのとおりと思う道理は、極めて簡単である。すなわち生物界の現象に基づいて、一、生命を保存しなければならない。二、この生命を継続しなければならない。三、この生命を発展させなければならない（すなわち進化である）。生物はすべてこのようにしているし、父親もこのようにするのである。」（「我們現在怎様做父親」、1919、前掲）

「生命はどうして受け継いでいく必要があるのか。すなわち発展しなければならず、進化しなければならないからである。個体は死を免れることができず、進化もまたいささかも止まることがない。そのため継続して、この進化の道を歩くしかない。この道を歩くにはある種の内的努力がなければならない。例えば単細胞動物に内的努力があって、それを積み重ねて複雑になるだろう。無脊椎動物に内的努力があって、それを積み重ねて脊椎が発生する。だからあとから起こる生命は、必ずそれ以前のものよりいっそう意義があり、いっそう完全に近い。このためにさらに価値があり、さらに尊い。前者の生命は、後者の犠牲とされるべきである。」（「我們現在怎様做父親」、1919、前掲）

魯迅はこのように生物界の進化論に基づき、現在の中国の父親が子供に対して採るべき生き方を提起する。進化の道を歩くには生物に内的努力の存在する必要がある。それゆえにあとから起こる生命は、それ以前のものよりいっそう意義と価値がある。それ以前の生命は犠牲となって、あとから起こる生命の進化と発展に寄与しなければならない。

「中国の社会は、『道徳がすばらしい』と言うけれども、実際は愛しあい助けあう心を全く欠いている。すなわち『孝』『烈』の類の道徳も、ほかの者がいささかも責任を負うことなく、一途に幼者・弱者を懲らしめる方法である。」（「我們現在怎様做父親」、1919、前掲）

このような現状を踏まえて、魯迅は進化論に基づいた中国旧社会の改革に言及する。

「どうしようもないので、まず目覚めた人から着手して、それぞれ自分の子供を解放するほかない。自らは因習の重荷を背負いつつ、暗黒の水門を肩に支えきって、彼らを広々とした光明の場所に放つのである。こののちは子供たちが幸福に生活し、合理的に人間となるように。」(「我們現在怎樣做父親」、1919、前掲)

これは、進化論を中国旧社会の世代間の役割に適用し、前の世代の自己犠牲によって次の世代を解放するという、中国改革を意図するものである[*21]。

この時期の魯迅の中国変革論は、次のような内容をもつと考えられる。思想改革によって人々（知識人を中心に[*22]）は覚醒し、彼らは国民性の悪の改革をさらに推し進める。また、この目覚めた人々が将来の中国変革の戦士となる[*23]。同時に、現在において目覚めた人々は進化論に基づいて、自らの生命を受け継ぐ子供たちを解放する、すなわち生物の内的努力に基づいたより優れた次の世代を解放する。目覚めた父親の世代は、「一方で古い帳簿を清算しつつ、他方で新しい道を切り拓く」(「我們現在怎樣做父親」、1919、前掲)役割、自らは因習の重荷に耐えながら、子供たちを解放する前の世代の役割を、果たすことになる。

こうした考え方は、中国国民性の改革と進化論が結びついたものと言える[*24]。これは、思想改革と生物の進化論に基づいて、前の世代としての人の父親が、子女に対して父親自身の負うべき道、選択するべき道を指し示すものである。これは、進化論が中国旧社会の改革に繋がる性格、中国変革の道筋・方法に結びつく性格をもつものと言える[*25]。

さらに、こうした考え方の背後には、人間の天性の善・愛（「朴素之民〔素朴な民〕」〈「破悪声論」、1908・12発表〉）に対する魯迅の信頼があったと思われる。動物の場合、親は子供に無償の愛を献げ、子供は生命を受け継いでいく。

「人類もこれ以外のものではなく、欧米の家庭ではたいてい、幼者・弱者

を本位としている。」（「我們現在怎様做父親」、1919、前掲）
生物としての進化論的な（内的努力を受け継ぐ）父親の生き方の基礎には、こうした人道主義的な人間の天性の善に関する信頼と、幼者・弱者に対する人道主義的な愛が前提とされていた[26]。

1920年頃、魯迅に一つの転機が訪れる。すなわち魯迅は『労働者シェヴィリョフ』（アルツィバーシェフ原作、『工人綏恵略夫』、1920・10・22訳了、商務印書館、1922・5、初出は『小説月報』第12巻第7-9号、11号、12号、1921・7-9、11、12）と出会った。その中で、自らの心の中にもある「個人的無治主義」の心情（1905年ロシア革命の挫折体験をしたシェヴィリョフの憤激の心情と共通する、魯迅自らの憤激の心情）を確認し、また人道主義者アラジェフの理想の高唱に対するシェヴィリョフの批判を認識した。理想の空唱は現実に対する無策を意味し、理想を信じた者の不幸をいっそう深くする。また、「即小見大」（1922・11・18、『熱風』）の事件に基づいて魯迅は、中国旧社会における自己犠牲が必ずしも大衆に理解されず、大衆による単なるお供え分けに終わることを言い、無益な自己犠牲を避けるべきだとした（「娜拉走后怎様」、1923・12・26、『墳』）[27]。

こうした経過をつうじて、それ以後魯迅は、無益な自己犠牲を他人に提唱することを止め、また人道主義を高唱することを止める。父親の世代の自己犠牲による子供の世代の解放という社会改革の理想は、それ以後他人に勧める形では提唱されることがなかった。また、もしも人道主義があるものとすれば、理想の高唱ではなく、それを中国の現実の中から汲みとらなければならないと考えた。ただ、魯迅自らの生き方として、1924年頃から魯迅は、現実の文学活動における青年文学者育成のために、自己犠牲的に奮闘する[28]。それは、よりすぐれた次の世代の文学者を育成するという、進化論的思想の枠組みの中での実践活動、すなわち理想の空唱ではない、自らが選択する実践活動であったと思われる[29]。

３．中国変革の当面する最大の課題は軍閥政府支配の打倒であること

北洋軍閥政府は、1926年三・一八惨案において徒手空拳の請願デモ隊に

発砲し、暴行を加えて弾圧し、死傷者200数名を出した。

これ以前、魯迅は中国変革の主要な当面の課題が国民性の悪の改革（精神革命、思想革命）にある、と考えていた。この事件をつうじて魯迅は、それにくわえていっそう緊要の課題が、国民性の悪を現実に体現し、中国変革を凶暴な武力によって阻む軍閥の支配体制にあると考え、またそれと結託する知識人の役割にいっそう注視するようになったと推測する。

そしてこの事件によって魯迅に沸きおこった心情は、教え子の死に対する負い目をべつにすれば、軍閥政府とそれに結託する知識人に対する激しい憎悪であった。そしてその憎悪は、これ以前における旧社会全体に復讐を計ろうとする挫折した改革者としての憎悪（シェヴィリョフの憤激の心情）とは内実を異にして、中国変革への指向をはっきりと内包していた。魯迅は、中国変革の課題として国民性の改革という精神次元の課題にくわえて、いっそう緊要で具体的な権力構造の変革の課題について認識を深化させた[*30]。

言い換えると、権力構造についての認識の深化は、魯迅が1925年頃の女師大事件において軍閥政府を後ろ盾とする校長側と具体的に戦い、論戦し、そして上述のように1926年三・一八惨案での軍閥政府の凶暴な支配権力の弾圧を経験したことによると思われる。これまで社会改革（中国変革）の主要な課題と位置づけられてきた国民性の悪の改革について、1926年3月18日以降、魯迅は課題の緩急の観点から位置づけを決定的に変化させたと考える[*31]。中国人の国民性の悪は、依然としてそれ自体として存在し、それ以後も中国変革の一つの課題として提起され、あるいは変革の主体の形成の問題として存在した。しかし横暴な軍閥支配の権力構造の変革を、より緊要な現在の問題として検討・解決する必要性が、1926年3月18日以降、魯迅に明瞭に認識された[*32]。

魯迅は、三・一八惨案によって中国変革の当面する最大の課題が軍閥政府の打倒にあると考えた。時はまさに国民革命が高揚を迎える時期であった。

魯迅の教え子を含めた目覚めた青年たちは、三・一八惨案において軍閥政府の凶暴な武力の前に多数の死傷者を出した。魯迅は、今後目覚めた青年たちの生命を大切にする戦い方、塹壕戦を主張した[33]。このとき、魯迅は中国の変革論として武力による軍閥権力の打倒を、当面の最優先の課題と位置づけなおしたと思われる。そして1926年、『朝花夕拾』（1926年執筆の作品を所収、北京未名社、1928・9）において、魯迅は故郷における追憶の中のあるがままの民衆の姿を語り、自らの民衆像を見直している[34]。しかし若い世代（青年・学生）に対する啓蒙をつうじての、戦士の育成という進化論的な魯迅の考え方（あとからの生命はいっそう意義と価値がある）、すなわち青年･学生を主たる対象とする思想革命の考え方と有効性が否定されたわけではなく、中国変革に関する魯迅の思想の基礎の中に存在していたと思われる。

1926年8月、魯迅は北京を離れ、厦門大学に赴任する。それは北京での恐怖と多忙を避ける「休養」のためでもあった[35]。1927年1月、魯迅は厦門大学から広州の中山大学に転任し、再び積極的に文学活動と社会活動に復帰しようとする。

４．社会改革に適用される第二の様相の進化論の破綻

あとからの生命、のちの世代としての子供たち（いっそう意義と価値のある）に対して、また人道主義的な天性の善･愛をもった「素朴な民」（「破悪声論」、1908･12発表）に対して、1925年頃から魯迅は無条件の信頼を、決定的な喪失ではないにしろ、少しずつ失っている。このことを、次の箇所から窺うことができる。

「長明灯」（1925・2・28、『民国日報副刊』、1925・3・5-8、『彷徨』）では、廟の常夜灯を吹き消そうとする「彼」（旧社会に反抗しようとする者）に対して、一人の子供が銃声をまねて言う。

「腕をむきだしにした子供が、遊んでいた葦をもちあげると、彼にねらいを定め、桜桃のような唇をあけると、言った。

『パン！』」（60頁）

「頽敗綫的顫動」（1925・6・29、『語絲』週刊第35期、1925・7・13、『野草』）では、母親が身を売って子供を育てる。そののち家族をもった娘は、年老いた母親の過去の行為を責める。小さな子供は、その祖母に向かって、「殺せ」と言う。

「『一生私につらい思いをさせるのは、あんただ。』（中略）

『あの子たちまで側杖を食わせようとしている。』

一番小さい子供はちょうど枯れた葦の葉で遊んでいたが、このときそれを刀のように高く振りまわすと、大声で言った。

『殺せ。』」（205頁）

「孤独者」（1925・10・17、『彷徨』）では、魏連殳が次のように言う。

「『考えてみると、少し奇妙だと思うね。君のところへ来るときに、幼い子を大通りで見かけた。葦の葉っぱで僕をさして、殺せ、と言うんだ。その子はまだよく歩けないほどなのに……』」（92頁）

魏連殳は以前、次のように信じていた。子供は天真だ、悪いところは環境が悪くさせたのだ。中国の希望は、子供にある。こうした子供の天性の善に対する無条件の信頼を、魏連殳は失っていく[*36]。すなわち、人道主義（人間の天性の善･愛に対する信頼）を基礎とした進化論的な考え方（あとからの生命はいっそう意義と価値がある）に対して、魯迅にある程度の懐疑が生じていると言える。

また、青年文学者に対する失望は、1926年10月、11月頃の高長虹等による魯迅批判・攻撃によってもたらされた。

前述のように、人道主義を基礎とした進化論的考え方を適用する、すなわちあとからのより優れた世代に対する啓蒙と思想革命によって図られる社会改革の道筋・方法は、1926年三・一八惨案以後において、軍閥支配体制の打倒を中国変革における当面の最緊要の課題であると認識することによって、後景に退いた。しかしそのとき魯迅は、あとからの優れた世代（青年）に対する信頼を全面的に失ったわけではなかった。この信頼に対する決定的な打撃は、1927年4月、国民革命の途上における蒋介石の四・一二

クーデターの中でもたらされた。

それ以前、1926年7月、広東から北伐が開始され、国民革命の情況は破竹の勢いで進展していた。しかし1927年4月12日、国民革命軍総司令蒋介石は上海で四・一二クーデターを起こし[37]、同年4月18日、南京国民政府を樹立し、同年9月に、武漢国民政府が崩壊して、国民革命は挫折する。

1926年10月魯迅は許広平からの書簡をとおして、国民革命の「策源地」広州における、学生の状況、教育界の状況が何ら理想的なものではなく、また国民党左右両派の衝突闘争する社会であることを知り、驚いている。1927年1月広州に到着し、中山大学に赴任して以後も、広州の社会、学生運動に対する魯迅の評価は厳しかった。魯迅は、「革命の策源地」広州社会が基本的に旧社会の社会意識が改革されていない社会、上からの革命が行われた、軍人と商人が支配する社会であると認識している[38]。

あとから起こる生命である青年一般に対する、進化論に基づく無条件の畏敬・信頼の喪失・破綻の決定的確認は、1927年四・一二クーデターの経験以後のことであると思われる。この事件の中で、青年が同じ世代の青年を容赦なく殺戮した。魯迅は、1927年9月の「答有恒先生」(1927・9・4、『而已集』)で次のように述べる。

「私はいままでまだこの〈恐怖〉を仔細に分析していません。しばらく私自身がすでに診断して明らかな一、二のことを言いましょう。

第一に、私の妄想は破綻しました。私はいままで、いつも楽観をもっていました。青年を圧迫し殺戮するものは、たいてい老人であると思っていました。こうした老人がだんだんと死んでいけば、中国は必ず比較的に生気をもつことができる。現在私はそうではないことを知りました。青年を殺戮するものはむしろたいてい青年であるようです。しかもかけがえのない他人の生命と青春に対して、いささかも大切に思わない。(中略)血の遊戯はすでに始まり、役者はまた青年であり、得意げな色もあります。」(「答有恒先生」、1927・9・4、『而已集』)

以前の、進化論に基づく(生命の進化に対する内的努力を受け継ぎ、あと

から起こる生命であるがゆえに、いっそう意義と価値があるとされた）青年一般に対する無条件の畏敬・信頼は、この1927年4月に決定的に破綻したと思われる。ここであらゆる青年（あるいはのちの世代）が必ずしも一人の人間として、老人より進化した、前の世代より進化した、より優れた存在である、とは考えられなくなったと思われる。これ以前、上述のように、例えば「長明灯」（1925・2・28、『彷徨』）等においてのちの世代（幼い子ども）に対する懐疑が表現された。その懐疑は、1926年末頃、青年文学者高長虹等による魯迅批判･攻撃によってより強められた可能性がある。ただ、青年文学者に対する失望は、文学青年に対する懐疑（あるいは裏切られた献身者としての魯迅の復讐感）であっても、青年一般に対する、無条件の畏敬に対する懐疑までを意味するものではなかったと思われる[*39]。そして1927年4月四・一二クーデター以後において、進化論に基づく、あとから起こる生命としての青年一般の優れた点に対する無条件の畏敬・信頼は決定的に懐疑された。ここで魯迅は、あとからの世代に対する無条件の畏敬・信頼の破綻を確信していると思われる[*40]。魯迅はあとからの世代に中国変革（社会改革）を託する展望を失った、すなわち第二の様相の進化論は破綻したと言える[*41]。

これ以後魯迅は、青年を一人一人の個人として見て、測るようになったと思われる。例えば「怎麼写」（半月刊『莽原』第18・19期合刊、1927年10月10日、『三閑集』）で、魯迅は四・一二クーデターの犠牲者となった中山大学の学生畢磊に対する好ましい印象と哀惜を述べた。すなわち魯迅は四・一二クーデターの経験の中で、青年一般に対する、無条件の畏敬・信頼を破綻させたけれども、四・一二クーデター以後、そのとき犠牲者となった、実際に畏敬・信頼に値した一人の青年畢磊をここで回顧し尊重している[*42]。

また、第一の様相の進化論について言うと、四・一二クーデター以前、魯迅は「這個与那個」（1925・12・8、『華蓋集』）で、人類の進化について次のように言う。

「人類は結局のところ進化している。また章士釗総長によれば、米国のどこかでは進化論を語ることを禁じている。これは実に私を驚愕させる。しかし禁止することはひたすら禁止するとしても、進むことは必ず進むものだ。」(「這個与那個」、1925・12・8、『華蓋集』)
また、白話文について次のように言う。
「古文はすでに死んだ。白話文はなお改革の道の橋梁である、なぜなら人類はなお進化しているから。たとえ文章についてであっても、必ずしもひとり万古不磨の準則があるわけではない。米国の或るところではすでに進化論を語ることを禁じたと言うが、しかし実際には、恐らくついに効果がないであろう。」(「古書与白話」、1926・1・25、『華蓋集続編』)
1925年26年において魯迅は、進化論的な展望において人類の進化・文化の発展を信じ、そして進化の道において自らが橋梁的存在、中間物的存在(否定的側面と肯定的側面を含めて)であることを疑わなかった(「写在『墳』后面」、1926・11・11)。
1927年四・一二クーデター後において、魯迅は「文学和出汗」(1927・12・23、『而已集』)で次のように言う。
「人間性は永久に不変であるのか。
類人猿、類猿人、原人、古人、今人、未来の人……もしも生物がほんとうに進化するのであれば、人間性が永久不変であることはできない。類猿人は言わないまでも、たとえ原人の気質であれ、私たちは推測しうることが困難である。私たちの気質も、おそらく未来の人が必ずしも理解しないだろう。」(「文学和出汗」、1927・12・23、『而已集』)
魯迅は1927年12月の段階で、類人猿から今人にいたる人類の進化を前提にして、人間性の変化を議論している。
ゆえにこのような事情を見ると、おそらく、1927年四・一二クーデターによって魯迅の進化論に起こったことは、魯迅における進化論の全面的破綻、進化論の全面的否定ではなかった。あとから起こる生命としての、後の世代(青年)一般に対する無条件の先験的畏敬・信頼(その優れた点が

中国変革の礎となりうるという意味で）が崩壊した。言い換えると、社会改革の道筋・方法に適用された進化論が、中国変革論としての進化論の適用が、すなわち第二の様相としての進化論が崩壊したものであると考える[*43]。第一の様相の進化論は、すなわち自然科学に基づく啓蒙的進化論は、生物学における進化論は、崩壊していない。すなわち前期をつうじて継続していると考える。

注

*1：「『魯迅雑感選集』序言」（『魯迅雑感選集』、上海青光書局、1933・7、底本は上海文芸出版社〈1980・2〉）で、瞿秋白はまた次のように言う。

「魯迅は言う、『私は1927年血によって驚いて茫然自失となり、広東を離れた。口ごもり、はっきりと言う度胸のなかった言葉は、《而已集》に掲載した。』たとえそれ以後の《三閑集》（1928-29）、《二心集》（1930-31）であっても、泣くに泣けず笑うに笑えない『だけ〔原文は而已――中井注〕』のものではなかっただろうか。しかし、魯迅の思想はこの期間、まさしく蹂躙され侮辱され欺かれた一般の人々の彷徨と憤激を反映しており、彼はそこで進化論から最終的に階級論にいたり、個性の解放を追求する進取的な個性主義から、世界を改造する戦闘的な集団主義に進んだ。」

*2：私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語文献〕

①「関于魯迅之二」（周作人、1936・11・7、『瓜豆集』、上海宇宙風社、1937・3）

②「回憶魯迅」（許寿裳、『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1952・6）

③『回憶魯迅』（馮雪峰、人民文学出版社、1952・8、底本は、『魯迅巻』第8編〈中国現代文学社編〉）

④「魯迅与進化論」（銭理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、底本は、『魯迅其人』〈社会科学文献出版社、2002・3〉）

⑤「魯迅“改造国民性”思想的評価問題」（竹潜民、1982・2、『魯迅晩年思想的当代解読』、当代中国出版社、2001・7）

⑥「魯迅提出改造“国民性”及其認識的発展」（胡炳光、『魯迅“国民性思想”討

論集』、鮑晶編、天津人民出版社、1982・8）
⑦「魯迅前期思想中的個性主義、進化論及“国民性”問題」（魏競江、『魯迅研究文叢』第4輯、湖南人民出版社、1983・7）
⑧「従一部書看魯迅研究――読『魯迅“国民性思想”討論集』」（竹潜民、1983・11、『魯迅晩年思想的当代解読』、当代中国出版社、2001・7）
⑨「早期、中期到后期的思想発展」（倪墨炎、『魯迅后期思想研究』、人民文学出版社、1984・8）
⑩「中国普羅米修斯的精神歴程――『摩羅詩力説』・『苦悶的象徴』・『芸術論』」（伍暁明、『魯迅研究動態』1988年第3期、1988・4・20）
⑪「魯迅対馬克思主義批評伝統的選択」（『中国左翼文学思潮探源』、艾暁明、湖南文芸出版社、1991・7）
⑫「魯迅与赫胥黎的道徳起源論、善悪論」（劉福勤、『上海魯迅研究〈4〉』、1991・6、上海魯迅紀念館編）
⑬「進化論在魯迅后期思想中的位置――従翻訳普列漢諾夫的《芸術論》談起」（周展安、『中国現代文学研究叢刊』2010年第3期、総134期）

〔日本語文献〕
①『露国共産党の文芸政策』（蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11、底本は『ロシア共産党の文芸政策』、マルクス書房、1928・5・20、1930・6・15第3版〈初版は1928・5・20〉）
②「魯迅を語る――北支那の白話文学運動――」（山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3）
③『芸術論』（プレハーノフ著、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、底本は1929・10・3第7刷）
④『階級社会の芸術』（プレハーノフ著、蔵原惟人訳、叢文閣、1928・10・1、底本は1928・10・20再版）
⑤「『天演論』ノート――中国における進化論の受容――」（野村浩一、『立教法学』第3号、1961・6・20）
⑥「進化論とニーチェ」（尾上兼英、『中国現代文学選集二 魯迅集』、平凡社、1963・1・5）
⑦『芸術と社会生活』（プレハーノフ著、蔵原惟人・江川卓訳、岩波書店、1965・6・16、底本は1967・10・20第3刷）
⑧「魯迅の『進化論』」（北岡正子、『近代中国の思想と文学』、大安、1967・7・

1）
⑨「『摩羅詩力説』覚え書き（1）」（北岡正子、『関西大学中国文学会紀要』第6号、1976・3）
⑩「摩羅詩力説における『人』の形成とその意味――『摩羅詩力説』覚え書き（2）――」（北岡正子、『関西大学中国文学会紀要』第7号、1978・3）
⑪「藍本『人間の歴史』」（上）（中島長文、『滋賀大国文』第16号、1978・12・20）
⑫「藍本『人間の歴史』」（下）（中島長文、『滋賀大国文』第17号、1979・12・20）
⑬「『狂人日記』の〈私〉像」（北岡正子、『中国文学会紀要』第9号、関西大学中国文学会、1985・3）
⑭「魯迅の仙台時代――〈退化〉の危機意識からの脱却」（阿部兼也、『季刊中国』1985年夏季創刊号、1985・6・1）
⑮「馮雪峰における『同伴者』論の受容と形成」（芦田肇、『東洋文化研究所紀要』第98号、1985・10・15）
⑯「魯迅仙台時代の模索――思想化されなかった『退化』意識の拂拭」（阿部兼也、『東北大学教養部紀要』第43号、1985・12）
⑰『魯迅目睹書目　日本書之部』（中島長文編刊、1986・3・25）
⑱「『摩羅詩力説』の構成」（北岡正子、『近代文学における中国と日本』、丸山昇等編、汲古書院、1986・10・20）
⑲「頽れいく〈進化論〉――魯迅『死火』と『頽れおちる線の顫え』――」（丸尾常喜、『東洋文化研究所紀要』第117冊、1992・3）
⑳「魯迅・馮雪峰のマルクス主義文芸論受容（1）――水沫版・光華版『科学的芸術論叢書』の書誌的考察――」（芦田肇、『魯迅研究の現在』、汲古書院、1992・9）
㉑『進化と倫理――トマス・ハクスリーの進化思想』（ジェームス・パラディス等著、小林傳司等訳、産業図書、1995・5・30）
㉒「補論　厳復『天演論』」（北岡正子、『魯迅　救亡の夢のゆくえ』、関西大学出版社、2006・3・20）
*3：魯迅の分期について、「早期、中期到后期的思想発展」（倪墨炎、『魯迅后期思想研究』、人民文学出版社、1984・8）は次のように言う。
「初期――〈五四〉以前、辛亥革命前後の時期。（中略）中期――〈五四〉以降、1927年第一次国内革命戦争の失敗まで。（中略）後期――1927年10月以降、すな

わち〈上海の十年〉。」
このような意見も参照し、私は本文のような分期をする。
*4：「摩羅詩力説」（『河南』第2、3号、1908・2、3、『墳』）で次のように言う。
「我が中国の愛智の士は独り西洋とは異なり、心が注がれるのは、はるか遠い堯の唐、舜の虞の時代、或いは古代に入ったはじめ、人と獣が雑居した時代にある。その時代はあらゆる災いが起こらず、人は自然のままに安んじて、今の時代の汚濁して危険にみち、生活できないようではなかった、と言う。その説は、人類進化の史実に従えば、事実とまさに反対方向に向かうものである。」（67頁）
また、厳復は「天演論上　新反第十八　復案〔厳復注釈――中井注〕」（『天演論』、厳復訳述、光緒24年〈1898年〉刊、底本は『天演論』、馮君豪注訳、中州古籍出版社、1998・5、237頁。原著は、ハックスレーの『進化と倫理』（“Evolution and Ethics”）、厳復はその中の二篇「プロレゴメナ」と「進化と倫理」を翻訳した）に次のように言う。
「世道必進、后勝于今而已〔世道必ず進み、後は今に勝る而已〕。」
魯迅は「瑣記」（1926・10・8、『朝花夕拾』）において、1901年頃、南京の鉱務鉄路学堂で勉強していた頃をふり返り、次のように言う。
「新しい書を読む気風は流行しはじめており、私も中国に『天演論』と言う本があることを知った。日曜日に城南に出かけて買ってきた。白い紙の石印本の厚い本で、値段は500文きっかりだった。開いて読むと、立派に書かれた文章で、最初に次のように言う。
『ハックスレーは独り部屋にいた。英国ロンドンの南、山を背に野に面し、窓外の光景は、ありありとまるで机下にあるようだった。2000年前、ローマの将軍シーザーがまだやってこないとき、このところはどのような景色だったのか、と彼は想像していた。ただ自然のままの、未開状態であったのだろうか……』
　ああ、世界にはハックスレーなどという人がいて、書斎でこのように考えていたのか、しかもこれほど新鮮な考え方で。一気に読み続け、〈物競〔生存競争〕〉、〈天択〔自然淘汰〕〉も出てきた。」
*5：「進化論とニーチェ」（尾上兼英、『中国現代文学選集二　魯迅集』、平凡社、1963・1・5）にこの指摘がある。
*6：「魯迅与進化論」（銭理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、『魯迅其人』、社会科学文献出版社、2002・3）は、ハックスレーの『天演論』（厳復訳述）がダーウィンの「『物競〔生存競争〕』、『天択〔自然淘汰〕』」、「『適者生存』」の学説を紹介し、中国国民に警鐘を与えたが、しかしそればかりではなく、進化論は

人々に希望も与えた、と次のように指摘する

「他面、ハックスレーの『自然と勝ちを争う〔与天争勝〕』という学説はまた、人々に希望を与えた。人は『自然と争い、自然に勝つ〔争天而勝天〕』ことができる、発奮し励みさえすれば、『人の支配を日に新しいもの近づければ、そののち国家は永続し、種族はそれによって滅びることがない』（『天演論』呉汝綸序）。」（426頁）

*7：「人之歴史」（1907、『墳』所収、『河南』第1号原載、1907・12、原題「人間之歴史」）は、進化論が真理として認められていく歴史的過程を、ギリシアの哲学者ターレス（Thales）から、リンネ（Linné）、キュビェ（Cuvier）、ゲーテ（Goethe）、ラマルク（Lamarck）、ダーウィン（Darwin）、ヘッケル（Haeckel）の進化理論への跡をたどって紹介する。そしてヘッケルの種族発生学を高く評価し、解説する。これは自然科学の啓蒙的文章であると言える。

また、1903年の「『月界旅行』弁言」（1903年10月発表、『訳文序跋集』）では、次のように言う。

「多少の知識を獲得させ、遺伝の迷信を打ち破り、思想を改良し、文明の補助をする。」

*8：「科学史教篇」（1907、『河南』第5号、1908・6、『墳』）は、科学（進化論）が中国変革とどのように関わるのかという観点から見ると、本文の第一の様相の進化論と第二の様相の場合を架橋する位置にある。「科学史教篇」（1908発表、前掲）は次のように論ずる。

科学はその知識によって自然現象を解明し、そのため改革が社会におよび、文明が進展し、人間の生活の幸福が増した。魯迅は、ギリシャの時代から19世紀まで、科学の発見と発展を跡づける。19世紀の物質文明は科学のもたらした実益であるが、しかし科学者は実益を求めたのではなく、真理を唯一の基準とした。科学と実益は、相互に支えあいながら進展してきた。目先の興業と強兵だけではなく、根本を求める「一二の士」がなければならない。1789年のフランス革命の時、フランスの窮地を救ったのは、科学者であった。そのとき、フランスに、科学と愛国が生まれた。しかしまた科学に偏してはならない。人間性を全面的に発達させるには、芸術も必要である。

「科学史教篇」（1908発表、前掲）は、第一の様相の進化論、科学的知識と考え方を普及し啓蒙する目的をもって書かれた文章と、第二の様相の、民族革命（中国変革）と結びついて現れる進化論を架橋する性格のものと思われる。「科学史教篇」の民族革命（中国変革）とは、根本を求める「一二の士」に支えられ、人

の自立によって達成されるものと言える。

*9：周作人は「関于魯迅之二」（1936・11・7、『瓜豆集』、上海宇宙風社、1937・3）で次のように言う。

「豫才〔魯迅の字――中井注〕のその時の思想は、だいたい民族主義で包括できると思う。例えばその紹介する文学も被抑圧民族を主としていたし、ロシアの場合は圧制に反抗するものを採った。」

*10：「補論　厳復『天演論』」（北岡正子、『魯迅　救亡の夢のゆくえ』、関西大学出版社、2006・3・20）による。「補論　厳復『天演論』」（前掲）は次のように指摘する。

「《天演論》は、従って、〈民〉を教化する役割を担うに足る〈人〉を読者に想定して書かれたものである。読者が、社会改革、国家救亡の意志を固め能動的行動者としての〈人〉にならんことを期待して、厳復は《天演論》を書いたのである。」（192頁）

「多くの読者の心に彼〔厳復を指す――中井注〕の希求が届き、国家存亡の鍵を握る〈民〉の教化は〈人〉の創出から始まることが理解されたことは、想像に難くない。《天演論》が一世を風靡し、世に警鐘をならしたといわれる所以である。魯迅もまた、その熱烈な読者の一人であった。《天演論》の思想内容の検討を通じて理解出来るのは、〈人〉を〈天行〉の恣意に挑む者ととらえ、さらにまた、〈人〉の教化のもとに〈民〉を位置づけるという、厳復の救亡思想の骨幹が、『摩羅詩力説』の趣旨の主要な部分に反映されているということである。」（193頁）

「『摩羅詩力説』に於いて民は、往々にして教化を経ていない無知蒙昧の俗衆として登場している。

《天演論》における厳復の主張は、魯迅に〈天〉に闘いを挑む者こそ〈人〉なのだという認識を与え、これが魯迅の〈人〉概念の一つの前提をなすに至ったのである。」（193頁）

*11：『天演論』（厳復訳、馮君豪注訳、中州古籍出版社、1998・5）と『進化と倫理』（トマス・ハクスリー原著、『進化と倫理――トマス・ハクスリーの進化思想』〈ジェームス・パラディス等著、小林傳司等訳、産業図書、1995・5・30〉の訳文）を参照した。

①「倫理過程〔治化――厳復の原文、以下同じ〕が浅ければ浅いほど、宇宙過程〔天行〕の威力はますます激しくなります。ただ倫理過程〔治化〕が進展してこそ、そののち宇宙過程〔天行〕の威力は弱まります。治平の極点においては、その効果は独特のものがあり、宇宙過程〔天行〕は支配を失います。このとき、生

存に適した人が、宇宙過程〔天行〕の強大さと多様さに適しているところにはありません。徳賢、仁義の人の、生存が最善なのです。」（『天演論』、「下　群治第十六」、前掲、432頁）
「社会の進化に及ぼす宇宙過程の影響が強ければ強いほど、その社会の文明は幼稚なのです。社会の進歩とは、宇宙過程を一歩ごとに押さえつけ〈倫理過程〉とでも呼びうる別のものによって置き換えていくことなのです。そしてこの過程の目的は、とりあえず存在している諸条件の全体に関してたまたま最適者であるものを生き残らせるということではなく、倫理的に最良のものを生き残らせることなのです。」（『進化と倫理』〈トマス・ハクスリー原著、前掲、157頁〉）
②「いま治道の功あることを求めるものは、天と戦わなければ、もとよりできないのです。宇宙過程〔天行〕をまねるのはだめであり、宇宙過程〔天行〕を避けるのもだめです。」（『天演論』、「下　進化第十七」、前掲、441頁）
「社会の倫理的進歩は宇宙過程をまねすることにあるのではなく、ましてやそれから逃げることにあるのではなく、それと戦うことにあるのだということを何よりもはっきりと理解したいものです。」（『進化と倫理』〈トマス・ハクスリー原著、前掲、158頁〉）
③「数百万年の火のように烈しく、水のように深い生存競争をへて、天は万物を作り、陶冶し、熔鋳し、錬磨して、現在のような状態にしたのです。天は理と気をもって推移し、人は善と悪によってその半ばに参与しましたが、その由来はこのように深く長いものです。いま数百年のわずかな倫理過程〔人治〕によって、その当初にある状況を改変しようとするのは、一動一静の功を立てるのは素早いとしても、人の心身はついにこのように早く改変することはできず、こうした空想は実現しがたいのです。このことは智者を待たずとも明らかです。しかし人の道はこれによって必ず阻まれるでしょうか、それはできません。風に気配を感じて鳴く犬を見ないでしょうか。それは最初狼でした。いまそれは絨毯に横たわろうとしますが、必ず数回回りあちこち地面を踏んで、それからやっと落ち着きます。それは祖先が山を歩いた習慣によっているので、その習慣が残っています。しかし長年飼育をして、牧羊をさせ、溺れる者を助け、番犬をさせて、その勇ましさは義獣の中で最たるものです。民が教導に従いよく変化することは、犬よりもたやすいのです。もしも今後、その智力を用い、その意志を奮い、真実の道に用い、共同の力によって行動するならば、数千年をへずして、最もすばらしい治世に至ることも可能です。」（『天演論』、「下　進化第十七」、前掲、442頁）
「われわれとともに生まれ、われわれの生存に大いに必要な宇宙自然は、数百万

年に及ぶきびしい試練の結果生まれたのであって、それを数世紀のうちに純粋に倫理的な目的に服従させることができるなどと想像するのは馬鹿げています。倫理的な自然は、この世界が続く限りこの粘り強く強力な敵と渡り合うことを覚悟しなければならないのです。しかし他方において、知性と意志が健全な研究の原理に導かれ、共同の努力をするように組織されれば、今日の歴史に記されている年月よりも長い期間にわたって、生存の条件を改めることができるでしょうし、その限度は際限がないと私には思えるのです。そして人間自身の自然を変えるためにも、多くのことができるでしょう。狼の兄弟を家畜の群れの忠実な番犬に変えた知性は、文明化した人間の中にある野蛮な本能を抑えるために相当のことができるはずなのです。」(『進化と倫理』〈トマス・ハクスリー原著、前掲、160頁〉)

*12：「立人」の思想については、「『摩羅詩力説』覚え書き（1)」(北岡正子、『関西大学中国文学会紀要』第6号、1976・3)、「摩羅詩力説における『人』の形成とその意味――『摩羅詩力説』覚え書き（2）――」(北岡正子、『関西大学中国文学会紀要』第7号、1978・3)、「『摩羅詩力説』の構成」(北岡正子、『近代文学における中国と日本』、丸山昇等編、汲古書院、1986・10・20）に詳しい。

*13：弘文学院在学当時の魯迅について、許寿裳は次のように言及する

「いつも私たちは三つの関連する問題について語らっていた。(1）どのようであってこそ理想的人間性であるのか。(2）中国民族の中で最も欠けているものは何なのか。(3）その病根はどこにあるのか。」(「回憶魯迅」、『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1952・6)

「(2）の問題に対しての追究において、中国民族に最も欠けているものは誠実と愛である、と当時私たちは思った。言い換えれば、偽って恥を知らず、お互いに猜疑して損ないあうという欠点に深く犯されている。スローガンはいつも聞いて響きが良く、標語や宣言はいつも立派である。本にはひたすら堂々たることを述べ、飾りたててある。しかし実際から言うと、全く別のことである。」(同上)

「(3）の問題については、当然歴史に追究の手を伸ばさねばならない。原因は多いけれども、二度異民族に奴隷とされたことが、最大最深の病根であると考えた。奴隷となった人間に、誠実を説き愛を説きうるようないかなる余地があろうか。……唯一の救済方法は革命である。」(同上)

二人の議論によれば、「中国民族」の改革は、人間性という精神的内面的な問題として議論されていたことが分かる。

*14：「魯迅の『進化論』」(北岡正子、『近代中国の思想と文学』、大安、1967・7・1）は次のように指摘する。

「魯迅は、一貫して、民族が人間性を回復することが国家救亡の大前提であるという考えを捨てていない。問題をこの前提の外にもち出すことは彼にとって無意味なことであった。（中略）彼の『進化論』は『天演論』によって呼びさまされた危機感をその出発点としているが、この民族滅亡の危機感は当時の有識者に共通のものであり、それを出発とした救亡論は魯迅ばかりのものではない。魯迅の『進化論』にあって独特なのは、救亡の方法を、価値の源泉の転倒によって新たに発見したことにある。魯迅はこの方法の発見によって人間性回復の契機をつかんだ。ここに人間変革を中心にすえた新しい革命論が誕生する。」

*15：「魯迅の『進化論』」（北岡正子、『近代中国の思想と文学』、大安、1967・7・1）

*16：魯迅は、「『吶喊』自序」（1922・12・3）で、1907年夏頃雑誌『新生』の出版を計画し、それが挫折した経緯を述べ、次のように言う

「私がこれまで経験したことのないやるせなさを感じたのは、これ以後のことである。私は当初その理由が分からなかった。あとで考えると、およそ人の主張は、賛成を得れば、前進を促すし、反対に会えば、その奮闘を促す。ただ見知らぬ人の中で叫んで、その人たちに反応がなく、賛成でもないし、反対もなく、身を果てしない荒野に置いたように、手をつかねてしまう、これは何という悲哀であろうか。私はそれで私の感じたものを寂寞とした。

この寂寞は日一日と大きくなり、大きな毒蛇のように、私の精神にまとわりついた。

しかし私は自ずから果てない悲哀があったけれども、決して憤懣には思わなかった。なぜならこの経験が私を反省させ、自分を見つめることになったからである。すなわち私は決して臂を振るえば応ずる者雲の如しという英雄ではなかった。」

この言及は、日本留学期の文学活動（「摩羅詩力説」〈1908年発表〉等の諸論文や『域外小説集』上下冊〈1909年出版〉）がほとんど反響を呼ばなかった以後において、魯迅に定着していった心情と思われる。ここには、バイロンのような「精神界の戦士」ではなかった魯迅自身の力量に対する失意がある。

またこの「寂寞」発生の回想には、魯迅帰国後の辛亥革命（1911年）の挫折の経過に対する心情も含まれている、と思われる。魯迅は「『自選集』自序」（1932・12・14、『南腔北調集』）で次のように言う。

「辛亥革命を見て、二次革命〔1913年〕を見、袁世凱の皇帝僭称〔1915年〕、張勛の復辟〔1917年〕を見、あれこれ見て、見るうちに懐疑しはじめた。そのため

失望し、大変失意に陥った。」
*17：魯迅は「忽然想到（3）」（1925・2・12、『華蓋集』）で次のように言う。
「私は、いわゆる中華民国がずいぶん長く存在しないように思う。
　私は革命以前、奴隷だった。革命以後まもなく、奴隷に騙されて、彼らの奴隷に変わったと思う。」
*18：陳独秀は、「文学革命論」（『新青年』第2巻第6号、1917・2・1、底本は『陳独秀著作選』第1巻〈上海人民出版社、1993・4〉）で次のように言い、精神界に盤踞する倫理・道徳・文学・芸術の革命が必要なことを指摘する。すなわち中国の改革には思想革命が必要であるとされた。
「安逸をむさぼる懦弱な我が国民は、革命を蛇蝎のように恐れている。そのため政治界は三度革命をへたけれども、暗黒はなお減少していない。その原因の小さな部分は、三度の革命がすべて竜頭蛇尾であり、十分に鮮血によって旧悪を洗い清めなかったことがある。その原因の大きな部分は、我が国人の精神界に盤踞する根深い倫理・道徳・文学・芸術の諸点が、黒幕に覆われて、汚れが深くたまっており、こうした竜頭蛇尾の革命がまだないからである。これが政治革命だけでは、我が社会に何の変化も生ぜず、何の効果もない理由である。」
1925年の段階においても魯迅は、「通訊（1）」（1925・3・12、『華蓋集』）で次のように言う。
「私は、現在の方法は最初にやはり何年か前《新青年》ですでに主張された『思想革命』を用いなければならないと思う。いまだにこの話であるとは悲しむべきことかも知れないが、しかしこれ以外にほかの方法はない、と私は思う。しかも『思想革命』の戦士を準備するのは、なお現在の社会とは関係がない。戦士が養成されるのを待って、そこでもう一度勝負を決するのです。」
*19：魯迅は「随感録　33」（1918・9・26、『新青年』第5巻第4号、1918・10・15、『熱風』）で次のように科学による啓蒙が必要なことを説く。
「私から見れば、『ほとんど国破れ族滅びんとする』中国を救おうとするのなら、『孔聖人·張天師の伝言が山東から来る』方法は全く病状に対応していない。救済のためには、怪しげな話の仇敵である科学しかない、上面でない真の科学しか。」
*20：中期文学活動において、第一の様相の進化論は次のようなところに窺われる。
「私が思うに、人と猿の同源説は、おそらくいささかの疑いも無くなっていると言える。」（「随感録　41」、『新青年』第6巻第1号、1919・1・15、『熱風』）
「種族の延長は、すなわち生命の連続は、確かに生物界の一大部分であると思う。

どうして延長しようとするのか。言うまでもなく、進化したいと考えるからである。」（「随感録　49」、『新青年』第6巻第2号、1919・2・15、『熱風』）
*21：魯迅は後に「『草鞋脚』小引」（1934・3・23、『且介亭雑文』）で次のように言う。
「最初、文学革命者の要求は人間性の解放であり、彼らは旧い既定の法を一掃しさえすれば、残るのは本来の人間、すばらしい社会である、と考えた。」
*22：魯迅は「通訊（2）」（1925・3・29、『華蓋集』）で次のように言う。
「私が思いますに、現在はどうしようもありませんので、知識人階級から一方で先行して方法を考えるより仕方がありません――実際中国にはロシアのいわゆる知識人階級はありません、このことは話はじめると長くなりますので、しばらく皆さんに従ってこのように言っておきます――民衆は将来を待って考えます。しかも彼らはまた区々たる文章で改革できるものではありません。歴史は私たちに教えたことがあります、清兵が入関し、纏足を禁じ、弁髪を垂らすように求めました。前者はただ告示を用いただけで、現在にいたるまでまだ棄てることができません。後者は別の方法を用いたので、現在にいたるまでまだ垂らしています。」
*23：魯迅は「無声的中国」（1927・2・28、『三閑集』）で次のように言う。
「思想革新の結果は、社会の革新運動を発生させる。この運動が発生すれば、もちろん一方ですぐに反動を生みだし、そこで戦闘を醸成する……。」
*24：魯迅は「忽然想到（10）」（1925・6・11、『華蓋集』）で次のように言う。
「いま覚醒している青年の平均年齢が20才であると仮定し、また中国人が老衰しやすいと言われるとおりに計算するとすれば、少なくともまだ共に30年反抗し、改革し、奮闘することができる。それで十分でなければ、さらに一代、二代と……。これらの数字は個人から見れば、恐るべきもののようだ。しかしもしもこの点を恐れれば、付ける薬はない。甘んじて滅亡するよりほかない。というのも民族の歴史においては、これは極めて短い時期にすぎないのであって、これ以外、さらに早い近道は実のところない。」
1925年頃の魯迅は、一代二代……と継続する息の長い反抗・改革・奮闘の必要性を中国変革の道筋に予想していたと思われる。
*25：魯迅は「忽然想到（6）」（1925・4・18、『華蓋集』）で次のように言う。
「私たちの現下における当面の急務は、次のようである。一、生存しなければならない。二、衣食が足りなければならない。三、発展しなければならない。いやしくもこの前途を阻害するものがいるならば、古であれ今であれ、人であれ鬼で

あれ、（中略）すべてそれを踏み倒すのである。」
ここでは、進化論に基づきつつ、旧社会における人の生きるべき方法を述べている。
*26：魯迅は、1925年5月30日の書簡で、これまでの自己の人生をふり返り、自分の考え方の特徴を許広平に説明している。
「実際のところ、私の考えは元々すぐには分かりにくいのです。というのもその中にはもとから多くの矛盾があるからです。私をして言わしむれば、『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長であるのかもしれません。ですから私は突然人々を愛し、突然人々を憎みます。仕事をする場合、時には確かに他人のためですが、時には自分のなぐさめのためで、時には生命をすみやかに消滅させることを願うが故に、わざと命をかけてやるのです。」（「『魯迅景宋通信集』二四」、1925・5・30、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）
ここでの、『人道主義』と『個人的無治主義』の起伏消長とは、社会変革に対する魯迅自身の生き方・考え方の振幅を指すと思われる。それに対して、魯迅の前期における第二の様相の進化論は、中国変革の筋道・方法と結びついて考えられていた。そしてその基礎には人道主義があった。
*27：「魯迅と『労働者セヴォリョフ』との出会い（試論）〈上〉」（『野草』第23号、中国文芸研究会編、1979・3・31、後に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第2章に所収）、「魯迅と『労働者セヴィリョフ』との出会い（試論）〈下〉」（『野草』第24号、中国文芸研究会編、1979・10・1、後に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第2章に所収）
*28：魯迅は「『魯迅景宋通信集』七三」（1926・10・28、前掲）で次のように言う。
「私はこの数年来いつも、他人のために力を尽くしたいと考え、そのため北京にいたとき、必死に仕事をし、ご飯を食べず、睡眠をとらず、薬を飲んで校正をし、文章を作りました。実を結んだものがすべて苦い果実であったとは、誰が予想したでしょうか。一群の人は私を広告とし自分の利益を計ったのは、言うまでもありません。小さな『莽原』でさえ私が去ると、けんかを始めました。」
*29：「魯迅と『労働者セヴォリョフ』との出会い（試論）〈上〉」（『野草』第23号、1979・3・31、前掲）、「魯迅と『労働者セヴィリョフ』との出会い（試論）〈下〉」（『野草』第24号、1979・10・1、前掲）
*30：この点について、「魯迅の復讐観について」（『野草』第26号、中国文芸研究会編、1980・10・31、後に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第3章に所

収）で述べたことがある。
*31：そのために、1926年後半の段階で魯迅は、北伐の進行を取りあげ歓迎する。「この地では北伐が順調だとのニュースも大変多く、きわめて心を爽快にさせます。」（「『魯迅景宋通信集』四八」、1926・9・14、前掲）
「今日当地の新聞のニュースは良いです。しかしもちろん信頼できるか分かりません。1、武昌はすでに攻略しました。2、九江はすでに獲得しました。3、陳儀（孫の師団長）等は電報を打ち和平を主張しています。4、樊鐘秀は開封を獲得し、呉は保定に逃げました（一説には鄭州です）。しかし要するに、たとえ割り引かなくてはならないとしても、情勢が良いというのは本当です。」（「『魯迅景宋通信集』」六四」、1926・10・15、前掲）
このほか、魯迅は北伐の進行を「同五七」（1926・9・30）、「同六七」（1926・10・20）、「同七一」（1926・10・23）、「同七三」（1926・10・28）、「同八〇」（1926・11・8）、「同八一」（1926・11・9）、「同九三」（1926・11・25）で取りあげ、国民革命の進展を歓迎する。
*32：三・一八以前、魯迅は中国変革の過程で、軍閥政府をどのように捉えていたのだろうか。魯迅は「空談」（1926・4・2、『華蓋集続編』）で次のように言う。「請願については、私はこれまで賛成しないものであった。しかしそれは決して3月18日のような虐殺があることを恐れたためではない。あのような虐殺は、夢にも思わなかった、これまでいつも〈刀筆の吏〉の考えをもって我が中国人を探っていたのだけれども。彼ら〔軍閥政府指導者層を指す――中井注〕が麻痺しており、良心がなく、ともに語るに足りないことを知っていただけだ。まして請願であり、まして徒手であった。このような陰険悪辣さと凶暴残虐さがあろうとは予想しなかった。」
*33：魯迅は「空談」（1926・4・2、『華蓋集続編』）で次のように言う。
「現在のように多くの火器が発明された時代になると、交戦の場合つねに塹壕を使用して戦う。これは決して生命の出し惜しみをするからでなく、生命の空費を容認しないからである。なぜなら戦士の生命は貴重だから。戦士の少数のところでは、この生命はいっそう貴重である。（中略）血の洪水で一人の敵を溺れさせ、同胞の死体で一つの欠陥を埋めることは、すでに陳腐な話となった。（中略）
　今回の死者の後に残した功績は、多くのものの人間の姿を剥ぎとり、予想外の陰険な心を暴露し、引き続いて戦う者にほかの方法による戦闘を教えたことにある。」
*34：「1926年27年における魯迅の民衆像と知識人像についてのノート（上）――

魯迅の民衆像・知識人像覚え書（1）」（『名古屋外国語大学外国語学部　紀要』第39号、2010・8・1）
*35：このことについて、「『魯迅景宋通信集』一一六」（1926・12・29、前掲）、「『魯迅景宋通信集』六四」（1926・10・15、前掲）等に窺われる。
*36：1926年以降、『朝花夕拾』において中国旧社会の現実の「素朴な民」の人生と運命が計り直され追究されると思われる。その一環として、旧社会における子供の人生に対する追究も、『朝花夕拾』において、例えば「『二十四孝図』」（1926・5・10、『朝花夕拾』）等で行われたと思われる。
*37：広州に波及したのが、4月15日であった。ここでは、「四・一二クーデター」を一連の事件の経過を意味するものとして使用する。
*38：魯迅のこの点についての考え方は、「魯迅を語る――北支那の白話文学運動――」（山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3）、「鐘楼上――夜記之二」（『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』）、「通信」（1928・4・10、『三閑集』）に窺われる。
　また魯迅は、「慶祝滬寧克復的那一辺」（1927・4・10、『集外集拾遺補編』）で次のように言う。国民革命の進展が順調である現在、革命をさらに進撃させなければならない。革命の進展を祝賀することは、革命とは関係がない。
「このような人〔革命を祝賀する人――中井注〕が多くなれば、革命の精神はかえって浮つき、希薄となることから、消失する結果になり、さらに続いて旧に復する。
　広東は革命の策源地であるが、このために先に革命の後方ともなっている。それがゆえに上に述べた危機が真っ先に存在する。」（「慶祝滬寧克復的那一辺」）
「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）では次のように言う。
「中国にはこの二種類の文学（旧制度に対する挽歌、新制度に対する謳歌）はありません。なぜなら中国革命はまだ成功していず、まさしく端境期であり、革命に忙しい時期であるからです。しかし旧文学は依然として多いです。新聞の文章はほとんどすべて旧式です。私が思いますに、これは中国革命が社会に対して大きな改変をしていない、守旧的な人に対して大きな影響を与えていない。だから旧い人がなお超然としていることができるのです。広東の新聞紙が語る文学はすべて旧いもので、新しいものは少ない。これも広東の社会が革命の影響を受けていないことを証明しています。新しいものに対する謳歌がなく、旧いものに対する挽歌もない。広東は依然として十年前の広東です。こればかりではなく、さらに苦痛を訴え、不平を鳴らすこともない。ただ労働組合がデモに参加するのを見

ます、しかしこれは政府が許可したものであり、圧迫があるために反抗するのではなく、上からの命令を受けた革命にすぎません。中国社会は改まっていません、だから懐旧する哀詞がなく、斬新な行進曲もありません。ただソビエト・ロシアにはすでにこの二種類の文学が生まれています。」(「革命時代的文学」)

*39:「『魯迅景宋通信集』九八」(1926・12・2、前掲)で魯迅は次のように言う。

「私は現在、文章を書く青年に対して、実際少し失望しています。希望のある青年はたいてい戦争に出かけてしまったようだと思います。筆墨を弄するものにいたっては、幾分なりとも本当に社会のためというものを見ません。彼らは多くは新しい看板を掲げた利己主義者です。」

これは筆墨を弄するものに対する失望であると思われる。また、魯迅は「導師」(1925・5・11、『華蓋集』)で次のように言う。

「青年はどうして一概に論ずることができるだろうか。目覚めている者がおり、眠っている者がいて、ぼんやりしている者がおり、横たわっている者がいて、遊んでいる者がおり、このほかにも多い。しかし、もちろん前進しようとする者もいる。」

魯迅は1925年の段階で、青年の存在の多様性に言及しながら、なお青年に対する希望を語っていると考える。

*40:「『三閑集』序言」(1932・4・24、『三閑集』)で魯迅は次のように言う。

「私はこれまで進化論を信じていた。いつも、将来は必ず過去に勝り、青年は必ず老人に勝ると思っていた。青年に対しては、これをいつも尊重し、しばしば十太刀を受けても、私は一矢をお返ししたにすぎない。しかし後に私は間違っていたとわかった。これは唯物史観の理論あるいは革命文芸の作品が私を惑わしたからではない。私が広東で、同じく青年でありながら両陣営に分かれ、あるいは投書して密告し、あるいは警察を助けて人を捕らえる事実を目撃したからである。私の考え方はこれによって音をたてて崩れ、後にいつも疑いの目で青年を見、二度と無条件の畏敬をもつことがなくなった。」

しかし本文で後述するように、魯迅は広州の四・一五以降、行方不明になった左翼の青年畢磊に対して哀惜を述べている(「怎麼写——夜記之一」、半月刊『莽原』第18・19期合刊、1927・10・10、『三閑集』)。そこからすれば、進化論についての魯迅の懐疑とは、あらゆる青年に対して無条件の畏敬をもたなくなったという事情であると思われる。

丸尾常喜氏の優れた論考、「頽れいく〈進化論〉——魯迅『死火』と『頽れおちる線の顫え』——」(丸尾常喜、『東洋文化研究所紀要』第117冊、1992・3)は、

崩壊（ひび割れ）しつつあった魯迅の進化論について次のように指摘する。
「魯迅の〈進化論〉は、旧社会の伝統を否定する〈伝統否定〉、その伝統によって育てられ、侵蝕されている自己を否定する〈自己否定〉、まだ侵蝕されていない子供を救うために、すすんで自分の生をさし出す〈自己犠牲〉とから成り立っていた。」（512頁）
「1925年、献身にたいする裏切りは彼の〈進化論〉をひび割れさせ、つき崩す力となって彼を苦しめつつあったのである。寡婦の脳裏にいっさいの過去が映しだされ、彼女の心中に渦巻いた眷念と決絶、愛撫と復讐、養育と抹殺、祝福と呪詛……は、魯迅の内面における〈人道主義〉と〈個人主義〉の激しい葛藤を示している。その葛藤が呻き声となって彼女の口から漏れ、彼女の皮膚のすべてが起こす顫えが空中の顫えとぶつかりあって、空をおおう旋風となるイメージは、私たちにひび割れた〈進化論〉を溶解し、新しく鋳なおしていく大きなエネルギーを感じさせ、魯迅における新しい母性の復活を予想させるのである。」（526頁）
　しかし私は、魯迅の進化論に大きな崩壊が起こるのは、1927年4月以降のことと考える。そして1927年4月以降に起こった魯迅における進化論の崩壊とは、本文で述べたように青年にたいする無条件の信頼の崩壊を意味する。それは進化論を社会思想的に受けとることによって、中国変革の道筋・方法に進化論を適用した魯迅の採った考え方・生き方の一つの崩壊と言える。その無条件の信頼とは本文で述べたように、次のような内容である。
「後に続く生命は、必ずやそれ以前の生命よりいっそう意義があり、さらに完全に近く、このためにいっそう価値があり、尊いものである。前者の生命は後者の犠牲とならなければならない。」（「我們現在怎様做」、1919・10、『墳』）
それゆえ私は、1927年4月以降、魯迅の進化論が理論として全面的に崩壊したとは考えない。崩壊したのは進化論を社会思想的に受けとろうとしたこと、すなわち中国変革の道筋・方法に進化論を適用する魯迅の第二の様相の進化論が、崩壊したと思われる。1928年以降、生物進化の理論としての魯迅の第一の様相の進化論は基本的に、マルクス主義の受容のための一つの基礎となったと考える。
*41：「早期、中期到后期的思想発展」（倪墨炎、『魯迅后期思想研究』、人民文学出版社、1984・8）は次のように言う。
「この尖鋭で激烈な階級闘争をへて〔四・一二クーデターを指す――中井注〕、魯迅がマルクス主義の著作を学ぶのはさらに自覚的になったし、このゆえに彼の『進化論思想』は徹底的に破綻した。」（53頁）
私は、魯迅の進化論が全般的に破綻したのではなく、第二の様相の進化論が破綻

したと考える。

*42：魯迅は、「怎麼写」（1927・9・15、前掲、『三閑集』）で中山大学の学生畢磊について次のように言う。

「『做什麼』が出版された後、かつて私に5冊送ってくれたことをまだ覚えている。私は、この団体が共産主義の青年の主宰するものだと思った。なぜならその中に〈堅如〉、〈三石〉等の署名があったからで、畢磊に違いない、通信場所も彼であったからである。彼はまた以前10数冊の『少年先鋒』を送ってくれた。この刊行物の中身は明らかに共産主義青年の作るものであった。はたして、畢磊君はおそらくきっと共産党だったのだろう。4月18日、中山大学で逮捕された。私の推測によれば、彼は必ずやとっくにこの世にはいなくなっているであろう、見たところ痩せて小柄な、聡明で実行力のある湖南の青年であった。」

*43：「魯迅与進化論」（銭理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、底本は『魯迅其人』〈社会科学文献出版社、2002・3〉）は、1927年四・一二クーデターの影響を次のように指摘する。

「きびしい階級闘争の実践的検証は、魯迅に対してきびしい真理を啓示した。『生物学の一般概念が、もしも社会科学の領域にもちこまれるならば、空論に変わるであろう。』（《列寧選集〔レーニン選集〕》第2巻336頁）魯迅が『答有恒先生』の中で、『自分も宴席をならべるのを手伝った』ことを責め、そして『今また八方平穏無事な〈子供を救え〉というような議論を行うとすれば、自分が聞いてさえ虚しいと感ずる』理由は、これは血の教訓によってついに彼に次のことを認識させたためである。『生物学の一般概念』を『社会科学の領域』にもちこんだこの思想は、客観的には支配階級を手伝うものにほかならない。これ以前において、魯迅はすでに進化論の消極的影響に対して清算をしていたけれども、しかし、この点については明らかに認識が不足していた。」（446頁）